

中世の葬送と遺体移送——「平生之儀」を中心として——

島津 毅

平安時代以降、葬送に当たって遺体を寺院などの宗教施設へ移送する事例が多く見られた。この際、遺体が生きている人のように運ばれる場合があった。先行研究は、これを「平生の儀」「如在之儀」^{によざいのぎ}などと称し、その目的が死穢の発生を隠蔽するためであると指摘していた。しかし、先行研究が扱う時代や素材がそれぞれ限られたものであったため、その指摘も十分な史料的裏付けをもって結論されたものではなく、多分に推測に基づいて構築されたものであった。

そこで、本稿はこうした遺体移送のさまを「平生之儀」^{へいせいのみぎ}と呼び、10世紀から16世紀にわたる事例を通して、最初に「平生之儀」と認められる要件とこの間における受容状況を明らかにした。そして、「平生之儀」が葬送の一環でありながら、葬礼とは扱わない特性があることを指摘した。

こうした「平生之儀」の基礎的な理解を踏まえた上で、「平生之儀」の目的について考察を進めた。まず、「平生之儀」と死穢との関係を検討した結果、「平生之儀」が用いられた遺体移送でも、死去と同時に死穢が発生している事例を数多く確認することができ、死穢の隠蔽が目的であるとする先行研究の理解が妥当ではないことを明らかにした。

次いで葬送には、穢とは異なり人を死に至らしめかねないという凶々しさが有ると考えられていたことを指摘し、この葬送の持つ凶々しさがもたらす障害を回避するための措置として、葬礼として扱われない「平生之儀」が用いられたと、その目的を明らかにした。そして、こうした遺体の移送を非葬礼で行うことの必要性から、遺体を生者として扱う等の形式をとる必要があった。これらのことによって、「平生之儀」の諸特徴が形成されてきたことを論述した。